

「和と洋の想を聴く」の公演を終えて



オーケストラ・アンサンブル金沢を指揮する筆者。[琵琶とヴィオラ、オーケストラのための「二天の風」]

東の日本で育った音楽と西の欧州で進展した音楽が、出会い、融合した時、そこにまた新たな芸術が創生される。そのドラマを紹介する。

オーケストラ・アンサンブル金沢との出会い

二〇一四年三月二十六日「和と洋の想を聴く」和楽とオーケストラ・アンサンブル金沢との個展を文京シビック大ホールで行った。この世に生を受けて六十年、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校に勤めて三十年余り、私の作曲人生の総決算を期するものであった。

現代音楽がますます前衛化し、先が見えなくなっていた時代、二十代から三十代にかけて、一九七四年にはインドネシアでのワヤン・クリ（ジャワ島やバリ島に伝わる人形を用いた伝統的な影絵芝居）、ガムラン（大、中、小の様々な銅鑼や鍵盤打楽器による合奏の民族音楽の総称）の旅。一九八〇年にはインド・ネパール仏跡巡拝、一九八三年には中国のシルクロード、そして一九八六年には韓国仏跡巡拝の旅と、アジアのシルクロードを辿る旅を続けていた。また、毎日のように藝大の音楽資料室で世界中の民族音楽のレコードをカセットテープにダビングをし、また副科で能の「謡」と「仕舞」を習い始めたのもこの頃のことであった。そして一九九〇年岩城宏之氏（一九三二〜二〇〇六）



東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校教諭 作曲家 高橋 裕 (たかはし ゆたか)



に小山薫、鈴木行一、多田栄一、そして私、の四人の作曲家でつくった「時の会」管弦楽作品展の指揮をお願いしたことが、オーケストラ・アンサンブル金沢との最初の出会いとなった。氏は高いアンサンブル能力を持つ日本最初の室内オーケストラ、オーケストラ・アンサンブル金沢を一九八八年に創設し、日本の作曲

家に作品を委嘱することを大きな柱とされた。またその中でも伝統文化豊かな金沢の地が母体であることを生かすために、邦楽とオーケストラのコラボレーションの曲も重視されたのであった。

邦楽器とオーケストラのアンサンブルをめざして

私たち「時の会」の四人に、邦楽器とオーケストラ・アンサンブル金沢との曲を書いてみないかと岩城氏から委嘱されたのは、作品展の公演後比較的早い時期のことであった。

コンサート「和と洋の想を聴く」は、オーケストラ・アンサンブル金沢から最初に委嘱された「笙とオーケストラのための『風籟』」（一九九二）から始まった。曲は、笙の一本の旋律が重なり合っただけで（和音奏法）となり、その技法はオーケストラまで（和音奏法）を及ぼし、やがて森羅万象の鳴動にまで到る一元的な宇宙を形作っていく。石川高氏の笙の光が差し込んでくるような演奏と、大きな揺りをもつオーケストラとの高まりに、息を呑む瞬間が現れた。この曲は国内ばかりではなく中米グアテマラのグアテマラシティーやアメリカのシカゴにても演奏され、十数回の再演の機会を得た曲となっている。

二曲目の「琵琶とヴィオラ、オーケストラのための『二天の風』」（二〇一三）は今回の演奏会のために書かれた最新作であった。

笙と同じく奈良時代に伝わった琵琶は、西アジア、アラビア圏などで古典音楽に用いる撥弦楽器であるウードを起源としている。またヴィオラは同じアラビア圏のルバーブ（リユート型の撥弦楽器）等を起源とされている。しかしながら、この二つの楽器はもともと撥弦と擦弦の違いがあるが、洋の東西に分かれて歴史を経ることによって、存在自体が全く異なる実体を持つ楽器となっていた。

琵琶の侘び寂びの響きから徐々に熱を帯びる田中雄氏の演奏は、ヴィオラの地の底から高まる須田祥子氏の演奏とともにオーケストラが加わり、大きな

宇宙が奏でられていった。

「和」と「洋」の想が見事に融合した瞬間

最後の曲は「能とオーケストラのための『葵上』」（二〇〇六）、実際の演能とともにオーケストラが奏する演奏至難の曲である。

今回、個展を自ら指揮する上で愕然としたことがあった。演奏の三曲とも曲の出だしの速度表示が、同じ「II」と非常に遅いテンポであることに気づいたのである。

作曲年代が二〇年の開きがあったにも関わらずである。しかし直ぐにそれも得心することは出来た。

それは大学時代から宝生流能楽師寺井良雄氏（一九四一〜二〇一〇）に教えを受け、二〇年ほど稽古を続



「能とオーケストラのための『葵上』」の舞台

けていた能の謡と仕舞の拍感と呼吸感であり、摺り足の運びの間でもあった。私にとっては身体に染み着いたテンポの間と空間であったのである。観世喜正氏と能楽師、囃子の神遊の方々とのリハーサルは、能の申し合わせと同じく公演前日の一度のみ。前日リハーサルは能を見ながらの手探り状態のままに、オーケストラの指揮は崩壊に近い様子を呈していた。ゲネプロでは、ホールに作られた能舞台で演じられる能に魅せられながらも、いくつもの決め所の間合いをまだ掴み切れずにはいなかった。本番を前にして、崖っぷちを歩む心地を味わった。

幕内の鏡の間から聴こえるお調べに始まり、能「葵上」の深奥に染み入るかのようにはオーケストラは奏し始める。「源氏物語」を飾る代表的な場面の一つである、六条御息所の生霊が葵上の枕に立ちより打たんとする前半、鬼女となりて行者と相争う後半、オーケストラは重層的に絡み合いながらも圧倒的な演能に、挑みかかるような迫真の演奏がなされ、遂には祈り伏せられて慈悲の姿となる御息所に、オーケストラは業の哀しみが消えゆくように四〇分に及ぶ曲を終えた。

私の至らぬ指揮にも関わらずソリスト、オーケストラ・アンサンブル金沢、能楽師の方々の渾身の演奏、演能により、オーケストラピットからステージに上がるまでの間、感謝の思いで涙を堪えることが出来なかった。

これこそ国内だけでなく海外にて行うべき公演だという意見を多くの方々からいただき、話が進み始めている。このような公演が実現出来たのも公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成、他財団の共催、助成、協力の賜物であった。

私の心の旅も、まだまだ歩み続けていくのであろう。

筆者略歴

一九五三年、京都市生まれ。東京藝術大学大学院作曲専攻修了。一九九一年、第一回芥川作曲賞受賞。オペラ「双子の星」、「般若連理交響曲」等の代表作がある。

※風が物にあたって発する音。風の声。 ※四天王の持国天と増長天。あるいは多聞天と持国天。または増長天と多聞天。日天子と月天子。梵天と帝釈天。